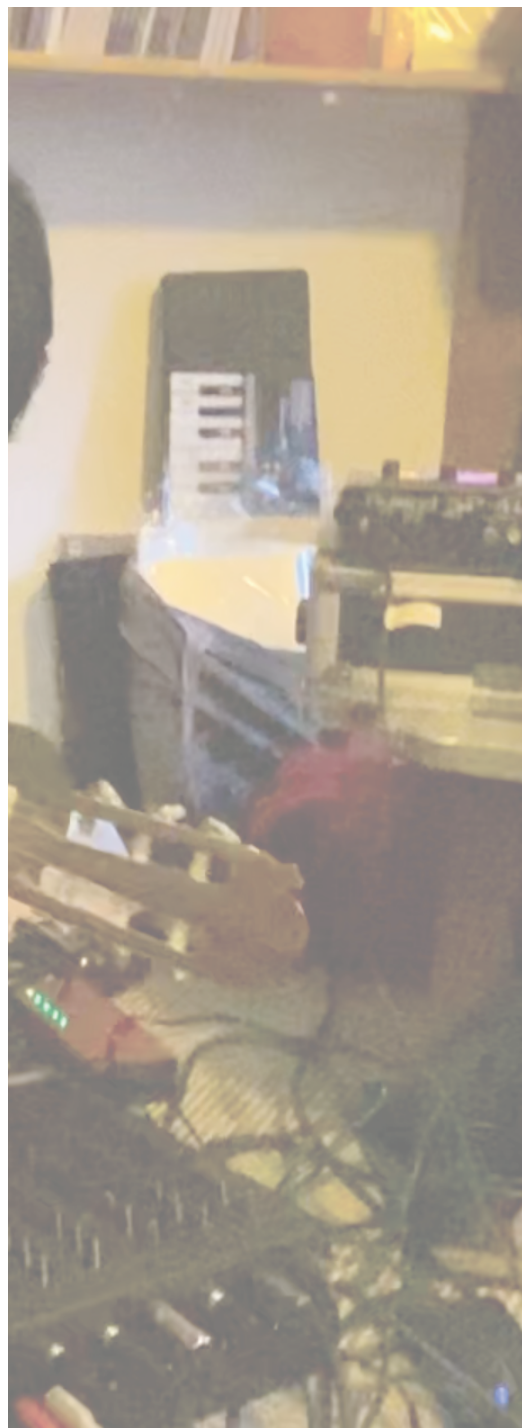
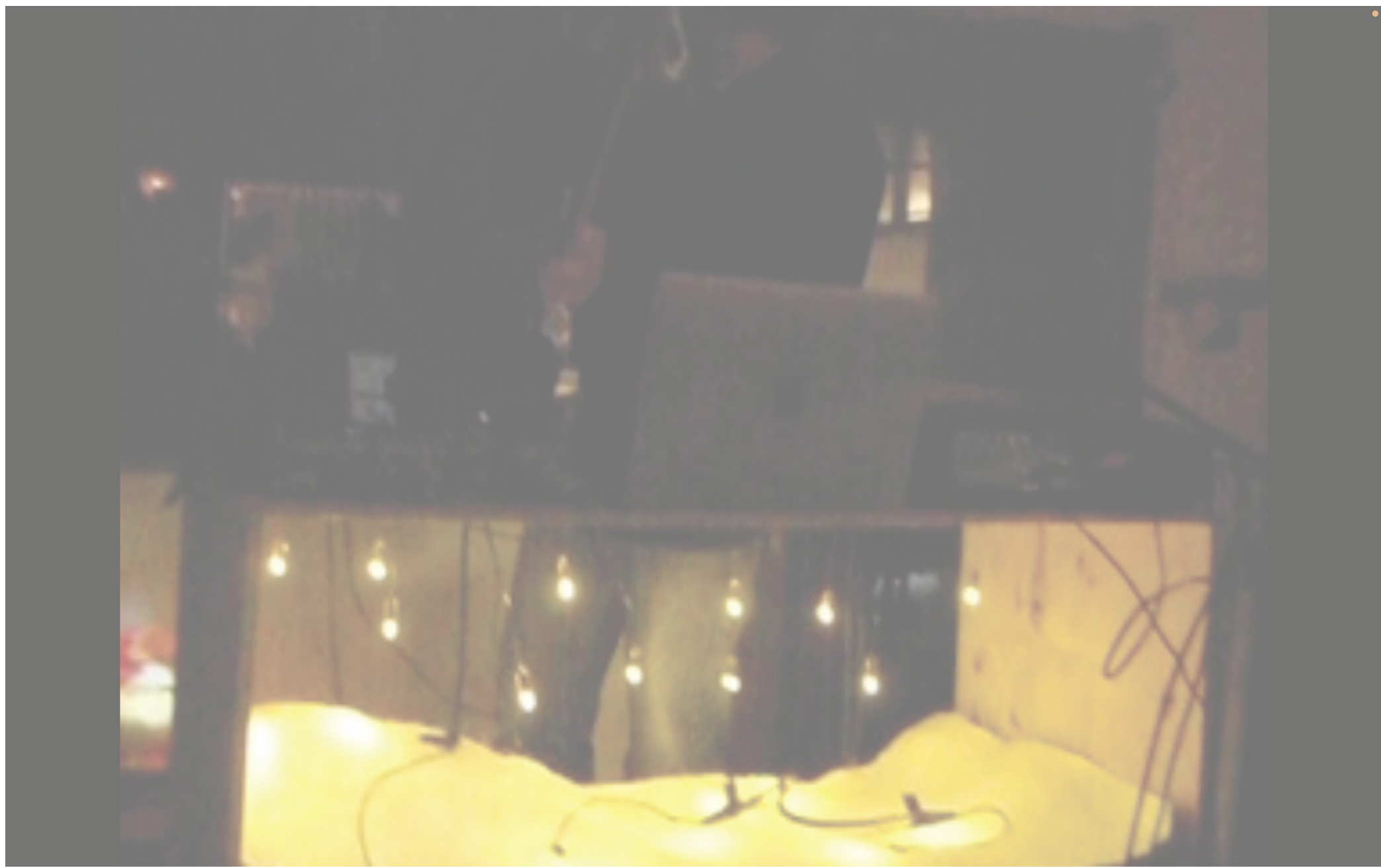


ある空間のための音楽？

—Brian Enoを手がかりとしたアンビエント・ミュージックの制作方法論の実践的探究

北研究室 202022 小林一誠



0. 音楽と建築は切り離せるものではない

私はアンビエント・ミュージックや環境音楽と呼称される音楽ジャンルの作家、いわゆるアンビエント作家として、作品のリリースやライブ活動を行っている。またそうであると同時に、大学では建築を勉強する建築学生でもある。二つの脈を持つ私にとって、建築と音楽という二つの存在は、互いに独立するものではなく、切っても切り離すことのできない関係を持っているものである。

例えばそれは、ライブハウスをはじめとした、演奏のできるカフェや、居酒屋、お寺などのライブ空間で演奏をするときに強く感じる。空間の広さからくる響きの差異や全体の音質をコントロールするイコライジングといった、直接的な音の変化だけではなく、舞台にたどり着くまでの動線、その舞台の床材からくる足裏の踏み心地、目線と天井の近さ、匂い、暗さ。あるいは、そのライブハウスがどのような立地にあるのか、それが路地裏であるのか、広い国道に面しているのかなど、微妙な差異が、楽曲の印象を変化させ、楽曲もそれに呼応するように、それが演奏される空間の固有性を浮立させる。

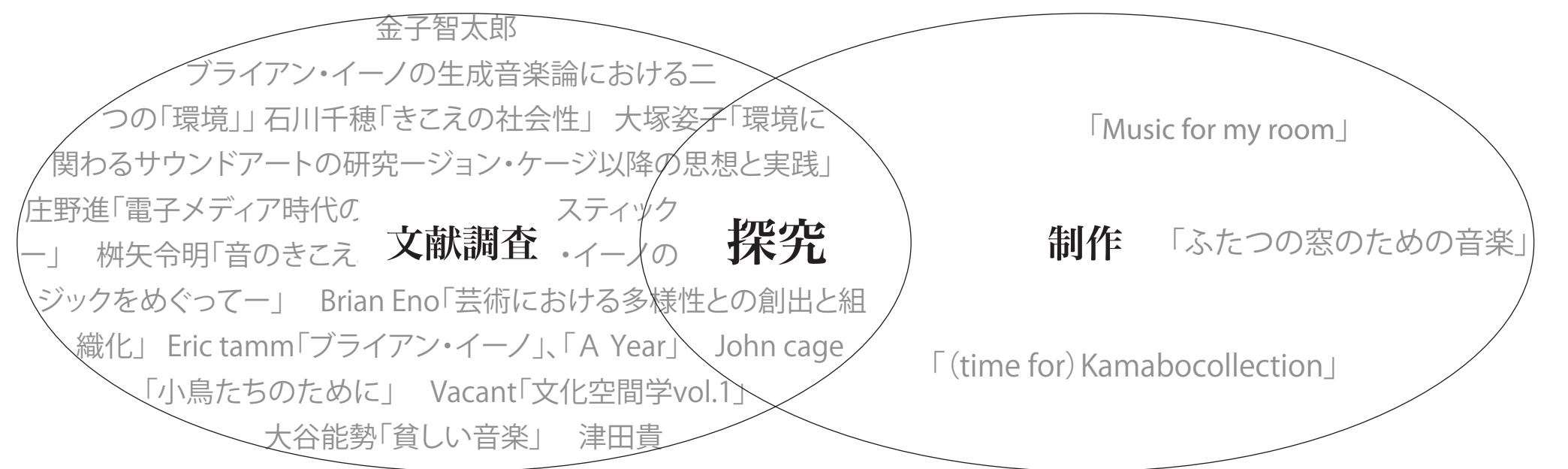
私にとっては、この「ある空間」で演奏するという経験が、音楽という行為の内に空間を、または建築を感じるようになったきっかけであった。あるいは、アコースティック・ギターを持った小学生5年生の頃から感じていたのかもしれない。あまり大きな音を立てることのできないリビングの中で、心狭しに感じながら弾く演奏と、庭先で父と作ったばかりのバルコニーで弾く開放的な演奏には、その心もちにも、演奏する内容にも違いがあった。

音楽と空間が呼応するようなこの現象の解明には、やはりどちらかを独立させての探究ではなく、その間を縫うような探究を行う必要があると考える。音楽学のみでなく、建築学のみでもない探究を。例えば、そういった音楽-建築という横断的な探究を行った人物に、**Brian Eno**(ブライアン・イーノ)という音楽作家が存在する。私の研究は、Enoが創作したAmbient Music やその代表的作品「Music for airports(空港のための音楽)」(1978)を題材に、先の音楽と空間の関係を解き明かすような、「ある空間のための音楽」を探究するものである。



1. 研究の目的と方法

本研究の目的は、「ある空間のための音楽」とはどのようなものか、あるいは概念についてを、**文献調査、またはEnoの作品分析**を通して考察し、それらを土台に、実際の**制作を通して Ambient Music における方法論**を探究することである。「文献調査」と「制作」とを行うことで、「ある空間のための音楽」の多角的な探究を目指している。



►研究の意義

近年我々と空間あるいは場所との関係は、技術革新によって希薄になってきている。SNSはじめ、発達したコミュニケーションツールによって、我々は本来の対面におけるコミュニケーションに必要な移動や時間などのあらゆるコストを削減してきた。それは音楽も例外ではない。配信サービスの普及によって、どこでも好きな時に、聴きたい楽曲を立ち上げることができる。そして、その中で我々が損なったものは場所との関わりであると私は考える。Edward Relph「場所の現象学」において、Relphは「どの場所も外見ばかりか雰囲気まで同じようになってしまい、場所のアイデンティティが、どれも同じようなあたりさわりのない経験しか与えなくなってしまうほどまでに弱められてしまうこと」を**没場所性**と呼ぶ。また没場所性はその場所についてだけでなく、場所のもつ意義を認めない潜在的姿勢のことでもあり、先に示したような情報技術を駆使する我々の無意識な働きかけも指しているのではないかと考える。

「ある空間のための音楽」を探究することとは、ある空間に立ち上がる音楽を探究することであるが、同時にその過程で行われるある空間との対峙において、その空間を「音」という窓を通して眺めることで、希薄になってしまった我々と空間との関係を今一度再考しようというものである。